

『菅家文草』の速詠

丹羽 博之

要旨

『菅家文草』巻五・四〇一以下の速詠詩（一時に二十首の五言律詩を詠む）を近体詩としての諸規則（平仄・粘法・押韻等）を遵守しているかを調査。其の結果、概ね律詩の作法を守っており、彼の詩才を十分に発揮していることが判明した。数ヶ月前に詠まれた十首の速詠詩とともに五十一歳の円熟期の良き思い出の一齣として作品の中に収められたであろうと推察した。

更に、十首の速詠詩中の三九四「柳絮」の詩は唐の鄭綮の灞橋之詩思のエピソードを利用して作られた可能性が有ることを「雪」「柳」「風」「詩思」と「诗情」との共通性から指摘した。様々な形で唐代の流行がほぼ時を同じくして日本にもたらされていた一例であろう。

キーワード…『菅家文草』 菅原道真 日本漢詩 平安漢詩

『菅家文章』の速詠

本稿は先に発表した『菅家文章』（巻五・三九一）の漢詩一日百首の逸話を巡って」（『菅原道真論集』勉誠出版〇三年二月）の続編である。前稿では主として、一時十首の速詠詩の分析を試みたが、本稿ではその後に詠まれた二十首の速詠の詩の分析を中心に考察を加える。

一

前稿において論旨の都合上触れることのできなかった「柳絮」の詩と鄭繁の詩話について考える。先ず道真の詩を挙げる。

394 柳絮

春雪紛々繞柳枝	春雪紛々として	柳枝を繞り
見知老絮陌頭垂	見知りぬ	老絮の陌頭に垂るることを
詩人詠得詩情苦	詩人は詠み得たり	詩情の苦なることを
莫使狂風第一吹	狂風をして	第一に吹かしむること莫かれ

三句目について、川口久雄『菅家文章 菅家後集』（本稿の道真の作品は全て同書による）の頭注では

昔から詩人たちはこの柳絮が風にみだれとぶ趣の、詩情をかきたてることを詠じている。杜甫の漫興詩に「顛狂柳絮隨風舞、輕薄桃花逐水流」。

とある。しかし、第三句は次に挙げる唐の鄭繁の瀾橋之詩思のエピソードをも踏まえていると考えられる。

古今詩話云、相国鄭繁善詩。（中略）或曰、相国近為新詩否。対曰詩思在瀾橋風雪中驢子上、此何以得之。

古今詩話に云う、相国鄭繁詩を善くす、（中略）或ひと曰く、相国近く新詩を為るや否やと。対へて曰く、詩思は瀾橋風雪中の驢子の上に在り、此に何を以てか之を得んと。

『唐詩紀事』卷六十五

鄭紫の主張は、（別離の場所としても名高い）灊橋において、役人が乗る馬ではなく、驢馬に乗って風雪の中に行ってこそ、詩心を掻き立てられる。相国などをしていては、詩心など湧くものか、というものである。

灊橋風雪は長安八景の筆頭に挙げられる名所である。鄭紫、字は蘊武。廬州刺史の時、黃巢の乱に遭うも、州境を犯さなかった。その功績により、時の皇帝僖宗から緋魚を賜った。詩を善くしたが、その語は俳諧が多く、「鄭五歇後体」と呼ばれた。前稿で論じた孫発の一日百首の逸話とともに鄭紫の逸話も今来の話題としてもて囃され、道真は一日百首の逸話から十首の速詠として詠み、鄭紫の逸話は詩の中で詠むという趣向を試みたのでないか。読む人が読めば両方の挿話を利用していることはわかるはずという意識があったのであろう。雪、柳、詩思と詩情、風という道真の詩のキーワードが鄭紫の逸話と一致する。道真は鄭紫の逸話を下敷きに句作りをしたと考えて良いであろう。

鄭紫は道真とほぼ同時代の詩人であるが、彼の逸話がほぼ時を同じくして日本にも伝わっていたのではないか。

都長安の東を北流する灊水に架かる灊橋は、長安から東に旅立つ時必ず渡る橋であり、長安の西を流れる渭水に架かる西渭橋（王維の「送元二使安西」の「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新」で有名）と並んで都の東西の別れの場所であった。西渭橋にも柳が植わっていたが、灊水も柳と別れの場所であった。松浦友久篇『漢詩の事典』（大修館書店）の「灊橋」の項目には、

中晩唐期、いわゆる「灊橋折柳」のイメージが定着した。中唐の楊巨源「灊岸の柳を賦ち得たり……」の詩に、「楊柳煙を含む灊岸の春、年年攀折せらるるは 行人（旅人）の為なり」（82）とあり、ほぼ同時期の韓琮「楊柳枝詞」にも、こ^まうい^まう、「灊陵橋上 離別多し、長条（長い柳の条）の地を払ひて垂るる有ること少なり」（83）と。

（以下略）

とある。中晩唐期に定着した「灊橋と折柳」の詩的イメージを道真も知っており、鄭紫の逸話とともに新しい素材として詠まれたのではないか。灊水周辺は現在も柳並木が残り、往事の面影をしのばせる。

二

次に道真の速詠詩について分析を試みる。道真は二度に亘って、速詠詩を詠作している。一回目の速詠については前稿でも触れたが、紙数の都合もあり、その全てを挙げ得なっかので今回その全詩を挙げる。

七年暮春二十六日、予侍東宮、有令曰、聞大唐有一日応百首之詩。今試汝以一時、応十首之作。即賜十事題目、限七言絶句。予採筆成之、二刻成畢。雖云凡鄙、不能焼却。故存之。

(七年暮春二十六日、予東宮に侍りしとき、令有りて曰く、聞くならく大唐に一日百首に應ふるの詩有りと。今試みに汝一時を以て十首の作に應へよと。即ち十事の題目を賜りて、七言絶句に限りたまふ。予筆を採りて成すこと、二刻にして成し畢はんぬ。雖ひ凡鄙なりと云ふとも、焼却すること能はず。故に存すといふ。)

391 送春

送春不用動舟車

●○○●●●○○○

唯別殘鶯與落花

○○●●○○●●○○

若使韶光知我意

●●●○○○●●●●

今宵旅宿在詩家

○○○●●●●○○○

下平六麻韻 韻字は車・花・家

392 落花

花心不得似人心

○○○●●●●○○○

一落応難可再尋

●●○○○○●●○○○

珍重此春分散去 ○●●○○●●●

明年相過旧園林 ○○○●●○○○

下平一二侵 韻字は心・尋・林

393 夜雨

不看細脚只聞声 ●○○●●○○○

暗助農夫赴畝情 ●●○○●●○○

通夜何因還悶意 ○●●○○●●●

尚書定妨早衙行 ●○○●●○○○

下平八庚 韻字は声・情・行

394 柳絮

春雪紛々繞柳枝 ○●○○○○●○

見知老絮陌頭垂 ●○○●●○○○

詩人詠得詩情苦 ○○○●○○●●

莫使狂風第一吹 ●●○○○○●○

上平四支 韻字は枝・垂・吹

395 紫藤

高閣藤花次第開 ○●○○○○●○

疑看紫綬向風廻 ○○○●●○○○

榮華得地長応賞 ○○○●○○●●

不放遊人任折来 ●●○○○○○○

上平十灰 韻字は開・廻・来

396 青苔

青苔滿地不棲塵

○ ○ ● ● ● ● ○ ○

似展平頭碧錦茵

● ● ○ ○ ○ ○ ● ● ○ ○

雨後風前宜染色

● ● ○ ○ ○ ○ ● ● ● ●

慙慙欲著上仙人

○ ○ ○ ○ ● ● ● ● ○ ○

上平十一真 韻字は塵・茵・人

397 鶯

自初出谷被人憐

● ○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○

春色尽時自默然

○ ○ ● ● ● ○ ○ ● ● ○ ○

若有遺音長不絶

● ● ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ●

明年可奏早梅前

○ ○ ○ ● ● ● ● ○ ○ ○

下平一先 韻字は憐・然・前 *二句目の四字目が孤平。自が二度使われている。

398 燕

梁頭展翅幾銜泥

○ ○ ○ ● ● ● ● ○ ○ ○

一々將雛起暮棲

● ● ○ ○ ○ ○ ● ● ● ○

春過先歸秋至日

○ ○ ● ● ○ ○ ○ ○ ● ●

涼風万里羽毛齊

○ ○ ○ ● ● ● ● ○ ○ ○

上平八齊 韻字は泥・棲・齊

399 黃雀兒

点検中庭黄雀児 ●●○○○○○
 春風便是可無私 ○○○●●○○
 報恩何必遭復処 ●○○○○●●
 銜得白環即此時 ○●●○○●●○

上平四支 韻字は兒・私・時 *三句目が二六対になっていない。但し、大系本も指摘するように、誤写があると思われる。四句目の四字目が孤平。

400 燈

挑尽蘭燈送五更 ○●○○●○○
 簷頭夜雨颯然声 ○○○●●○○
 吟詩不得多言笑 ○○○●○○●
 染翰猶要暗更明 ●●○○●●○○

下平八庚 韻字は更・声・明

以上の詩の特徴を以下に列挙する。

I 速詠十首が七言絶句としての条件を整えているか。近体詩としての必要な平仄の主な条件についてみると、

①誤写があると考えられる三九九「黄雀児」以外は、二四不同、二六対を守っている。

②下三連はすべて適合。

③孤平を犯す例…特に避ける四字目が孤平になっているもの。三九七「鶯」三九九「黄雀児」。但し三九九「黄雀児」誤写の可能性もある。

孤平でも許容される二字目が孤平の詩。三九一「送春」、三九三「夜雨」(起句と結句)、三九四「柳絮」、三九七「鶯」

④韻字は平、奇数句末は(三句)は仄の韻にする。…十首すべて適合。七絶の場合、起句末も押韻するのが原則だが、十首すべて起句末

も押韻。

⑤粘法を守っている。三九九「黄雀児」のみ失粘。但し、誤写の可能性がある。

⑥韻字と同じ韻の字は同一の詩には使わない。三九四「柳絮」のみ重複。

II 速詠故か、十首中で同一の漢字が多く使われている（詳細は前稿参照）。

i、不の多用。三九一、三九二、三九三、三九五、三九六、三九七、四〇〇

ii、春の多用。三九一、三九二、三九四、三九七、三九八、三九九

iii、風の多用。三九四、三九五、三九六、三九八、三九九

iv、頭の多用。三九四、三九六、三九八、四〇〇

v、人の多用。三九二、三九四、三九五、三九六、三九七

vi、得の多用。三九二、三九四、三九五、三九九、四〇〇

vii、仄韻の中でも入声を多く用いている。三九七は入声が四つもあり、三九一、三九四、三九九の詩には三つの入声。

III 白詩と重複する詩題や詩語が多くある（前稿参照）。

三

本章では、暮春の速詠の後、暫くして作られた速詠二十首の近体詩としての完成度などを中心に考察する。

東宮寓直之次、下令曰、去春十首、既知急捷。今取当時二十物重要。某不停滞、即来令之後、不敢固持。自酉二刻、及戌二刻、篇数僅成。慎令旨也。経数十日、要写一通、近習少年断失三首。初不立案、無処尋覓。一十七首、備于実録云尔。

東宮寓直の次で、令を下して曰く、去る春の十首、既に急捷なることを知る。今当時の二十物を取りて重ねて要む。某停滞せず、即ち来令の後、敢えて固持せず。酉二刻より、戌二刻に及ぶまでに、篇数僅かに成りぬ。令旨を慎めばなり。数十日を経て、一通を写

さんことを要むるに、近習少年断ちて三首を失へり。初めより案を立てず、尋ね覓むる処なし。一十七首、実録に備ふと云ふこと余り。

401 風中琴

清琴風処響	○	○	○	○	●
恰似有人彈	●	●	●	○	○
始自青蘋起	●	●	○	○	●
還随玉軫殘	○	○	●	●	○
誤雲驚別鶴	●	○	○	●	●
疑野払幽蘭	○	●	●	○	○
感興応無限	●	●	○	○	●
窓頭力意看	○	○	●	●	○

上平十四寒 韻字は彈・殘・蘭・看

402 竹

翠竹疎籬下	●	●	○	○	○
脩翫碧鮮	○	○	●	●	○
雨中重影合	●	○	○	●	●
風裏晚声伝	○	●	●	○	○
欲見龍鱗化	●	●	○	○	●
兼期鳳翼遷	○	○	●	●	○

『菅家文章』の速詠

寒霜如可拂

○ ○ ○ ● ●

万歳表貞堅

● ● ● ○ ○

下平一先

韻字は鮮・伝・遷・堅

403 薔薇

一種薔薇架

● ● ● ○ ○ ●

芳花次第開

○ ○ ● ● ● ○

色追膏雨染

● ○ ○ ● ● ●

香趁景風来

○ ● ● ● ○ ○

数動詩人筆

● ● ● ○ ○ ●

頻傾醉客杯

○ ○ ● ● ● ○

愛看腸欲断

● ○ ○ ● ● ●

日落不言廻

● ● ● ○ ○ ○

下平十灰

韻字は開・来・杯・廻

404 松

孤松呈勁節

○ ○ ○ ● ●

幸許在中庭

● ● ● ○ ○

久苦寒霜素

● ● ● ○ ○ ●

猶全細葉青

○ ○ ● ● ● ○

故山辞澗底

● ○ ○ ● ● ●

新地近仙亭

○ ● ● ● ○ ○

塵尾応堪用

●●●●

攀将奉執経

○○●●●○

下平九青

韻字は庭・青・亭・経

405 酒

閑亭開酒甕

○○○○●●

始覺聖賢心

●●●●○○

竹葉攀多少

●●○○○●

梨花酌浅深

○○○○●○

開眉杯裏伴

○○○○●●

促膝醉中吟

●●●●○○

自此知神用

●●○○○●

誰愁到晚陰

○○○○●○

下平十二侵

韻字は心・深・吟・陰

*開の字が重複。

406 牡丹

不知何処種

●○○○●●

喜見牡丹花

●●●○○○

帶雨傾臨架

●●○○○○

隨風引亞沙

○○○○○○

豈攀塵容苑

●○○○○●

当翫玉仙家

○○●●○○

『普家文章』の速詠

朗詠叢辺立

●●○○●●

悠々忘日斜

○○○○●●

407 古石

下平六麻

韻字は花・沙・家・斜

*四、五句が失粘。

孤拳誰得転

○○○○●●

苔薜不知年

○○●●○○

不過雲来触

●●○○○○

唯聞溜引穿

○○○○●●

諫応投緑水

●●○○●●

功欲補青天

○○●●○○

漱齒幽人意

●●○○○○

相看太可憐

○○○○●●

下平一先 韻字は年・穿・天・憐 *不が二度使われている。一句目の拳も先韻、近体詩では、押韻と同じ韻の字は詩の中に使わ

408 扇

団々紈素扇

○○○○●●

随手幾成功

○○●●○○

一転看孤月

●●○○○○

頻揺得細風

○○○○●●

逆愁秋早至

●●○○●●

偏待熱先隆

○●●○○○

取捨知時節

●●○○○●

輕身業豈空

○○●●○○

上平一東

韻字は功・風・隆・空

409 屏風

屈曲初知用

●●●○○●

施来不畏風

○○●●○○

質宜羅帳裏

●○○○○●

功見玉筵中

○○●●○○

人馬無来去

○○●●○○

煙霞不始終

○○●●○○

丹青知有功

○○○○●●

開合又西東

○○●●○○

上平一東

韻字は風・中・終・東 *知、来、不が二度使われている。四句目の功も東韻。詠みにくい詩題故か、東韻初めて重複

する。

410 錢

家兄何利国

○○○○●●

施用手中繁

○○●●○○

榆莢重輕種

○○●●○○

貨泉商賈源

●○○○○○

『菅家文草』の速詠

貪夫身有癖 ○○○●●●

高士口無言 ○●●○○○

腐◎誰応識 ●●●○○●

将令札節存 ○○○●●○

下平一先 韻字は繁・源・言・存

411 弓

烏号得旧弓 ○○○●●○

業在弛張名 ●●●○○○

細月空驚質 ●●●○○●

清風自発声 ○○○●●○

歩中楊葉遠 ●○○○○●

雲外白間輕 ○●●○○○

文武随時用 ○●●○○●

将表太平 ○○○●●○

下平八庚 韻字は名・声・輕・平 *三句目の驚が下平八庚韻。一句末仄声が原則だが十七首中この詩のみ平声。

412 石硯

文人施器物 ○○○○○●

石硯玉簾前 ●●●○○○

一片心猶重 ●○○○○●

多情手自伝 ○○○●●○

道成分水剂 ●●○●●

功遂染松煙 ●●●○●

月滿花開処 ●●●○●

吟詩得用專 ○○●●○

下平一先 韻字は前・伝・煙・專

413 筆

学業何為重 ●●●○●

織鋒用不輕 ○○●●○

崩雲毫末急 ○○●●○

垂露管中清 ○●●○●

豈見焚無意 ●●○●●

誰知格滅声 ●○●●○

願將羊桂質 ●○●●○

良史表嘉名 ○●●○●

下平八庚 韻字は輕・清・声・名 *四、五句が失粘。対句にするために無理な句作りが原因か。

414 圍碁

手談幽静処 ●○●●●

用意興如何 ●●●○●

下子声偏小 ●●○●●

成都勢幾多 ○○●●○

『菅家文章』の速詠

『菅家文章』の速詠

偷閑猶氣味 ○○○●●

送老不蹉跎 ●●●○○

若得逢仙客 ●●○○●

樵夫定爛柯 ○○○●○

下平五歌 韻字は何・多・跎・柯

415 鼓

八音調雅樂 ●○○●●

鳴鼓自堪聞 ○●●○○

見器驚春氣 ●●○○●

疑雷撥夏雲 ○○○●○

曲成隨舞拳 ●○○●●

声引任歌分 ○●●○○

小大知全節 ●○○○○

何時奏聖君 ○○○●○

上平十二文 韻字は聞・雲・分・君

416 蜘蛛

微虫猶有功 ○○○●●

結網自含情 ●●●○○

稟氣安身小 ●○○○○

隨風轉質輕 ○○○●○

簷前寬得地 ○○○●

籬上暫全生 ●○○●○

万物皆如是 ●●○○●

応知造化成 ○○○●○

下平八庚 韻字は情・輕・生・成 *三、六句失粘。

417 壁魚

白魚浮紙上 ●○○●●

游泳九流中 ○●●○○

繞軸高低去 ●●○○●

隨紙遠近通 ○○○●○

豈嫌漁父業 ●○○●●

唯妨學人功 ○●●○○

若得風前拳 ●●○○●

鱗飛道豈空 ○○○●○

上平一東 韻字は中・通・功・空

豈が二度使われている。韻は中、通、功、空の上平一東韻だが、七句目の風も東韻。以下に、この速詠の近体詩としての特徴を列挙する。

I 先の十首速詠と同じく五言律詩としての条件を整えているか。

①二四不同…すべて適格。

②粘法を守っている…四〇六、四一三、四一六は失粘。

③ 奇数句末を仄声にする：四一一の一句末のみ平声。

④ 韻字と同じ韻の字は同一の詩には使わない：四〇七、四〇九、四一一、四一七の詩は韻字と同じ韻の字を詩中に使う。

⑤ 近体詩では一首の中で同一の字は使わない：四〇五、四〇七、四〇九、四一七の詩は同じ字が二度使われている。四〇九の詩に至っては、「知、来、不」の三つの字が二度使われている。四一七の詩も、豈という詩には余り使わない字が二度使われている。

II 律詩では、頷聯、頸聯を対句にする。すべて適合。但しそれほどの名対句というものは認められない。

III 同一の漢字がよく使われる。

i、風の多用。四〇一、四〇二、四〇三、四〇六、四〇八、四〇九、四一一、四一六、四一七。十首速詠でも、風は五回使われた。

ii、知の多用。四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九（二回）、四一三、四一五、四一六。

iii、中の多用。四〇二、四〇四、四〇五、四〇九、四一〇、四一一、四一三、四一七。中は平声であるが、上記八例はすべて平仄に関する位置に使われている。

iv、用の多用。四〇四、四〇五、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四。

同一の字が頻繁に使われることは、速詠十首にも見られる傾向であった。前稿でも考察した如く、時間的制約と平仄合わせの為に同一の字の使用になったのであろう。

松浦友久氏『中国詩選（3）唐詩』（教養文庫）には次のような解説がある。

一般に七言絶句は、伸びやかで、華やかな詩型と言われ、古典的重厚さよりは新興歌曲的な軽快さを基調としており、五言律詩は均整のとれた、安定した詩型と言われる。六朝以来継続的に作られたため、近体詩の中ではもっとも古典的な雰囲気を生み出している。

初唐の応制詩を見ても五言律詩は多く詠まれており、『菅家文章』にも侍宴の詩に五律の占める率が高い。先の速詠が七絶という指定であったのに対して今回は特に詩型の指定がないので、七絶よりは高度で、華やかな宮廷でよく詠まれる五律で詩を作ったのであろう。川口氏も指摘する如く、李嶠百詠も五律であり、それに倣って今度はより難度の高い五律に挑んだのではないか。

速詠二十首（残っているのは十七首）の出来映えは、平仄などの規則を概ね守り無難にまとめ上げていると言えきであらう。

前回の速詠十首と併せて二度も下命に見事に応じ、詩人として誇らしい気持ちで家集に入れたのであろう。詩序には三首が探したが見つからなかった悔しさをにじませているように思うのだが。道真時に五十一歳、円熟期の良き思い出の一齣として速詠の詩群は『菅家文草』に収められた。